第 6 回　比較農業技術研究会(東南アジア大陸部稲作圏における農業近代化以降における技術展開の国際比較：「京都大学東南アジア研究所国際共同研究拠点Ⅱ型プロジェクト」)

日時：2017 年 6 月 13 日(火曜日)　15:00～17:00

場所：東南アジア地域研究研究所東棟第 1 会議室(E107)

参加者：安藤、内田、松田、小林、浅田、小坂、小林ゼミ 3 名

発表者：小林　知「カンボジア低地農村の稲作の変容（２）」
（添付資料　小林 170613-1　及び　小林 170613-2)

：安藤和雄「在地性」について（イントロのみ:できれば以下の３つの論文を次回　　までに読んでくること→１と３のみ本メールに添付。２は 6/23 以降に配布予定）
１．安藤和雄 1995「バングラデシュの農村開発の現状と援助」『発展途上国産業開発論』（河合明宣編）放送大学教育振興会：172-186.
２．安藤和雄 1998「農村の社会発展と共同組合ーバングラデシュの事例から」『協働組合新たな始動』(川口清史 編)．法律文化社：153－173.
３．安藤和雄 2001「『在地の技術』の展開―バングラデシュ・Ｄ村の事例に学ぶ」『国際農林業協力』24(7)．国際農林業協力協会：2－21.

(添付資料　安藤参考-1、安藤参考-3)

次回 CSAT 研究会　7 月 11 日(火)　東南ア研　東棟 1 階会議室 E107 15:00-17:00
発表者　安藤和雄（「在地性」についての続き）

カンボジア低地農村の稲作の変容（2）

比較農業技術研究会／比較農村社会論
20170613
小林　知

比較農業技術研究会

「東南アジア大陸部稲作圏における農業近代化以降における技術展開の国際比較」

農業技術は、植物生態、土地環境のみならず、経済、食事、民族文化、手間替えなどの社会システムや家屋の造りなどとも密接に関係している

農業近代化とは？

「緑の革命」：1940〜60年代を中心に行われた高収量品種の導入や化学肥料の大量投入による穀物の生産性を向上させる技術と取り組み

研究会の「仮定」

国家が農業におくプライオリティの低下／産業構造の変化

「緑の革命」など近代農業技術の導入による食糧増産の目標はすでに各地で達成された

その後の新しい変化：農民の自主性の解放／新しい技術の定着／生活様式の変化

地域の農業は、新しい段階に入り、従来にない新しい農業形態が出現しているのではないか？伝統的農業技術への回帰もそのひとつ？

発表の射程

これまでのカンボジア農村での調査は、技術からではなく、生業活動全般または社会からの分析が主だった

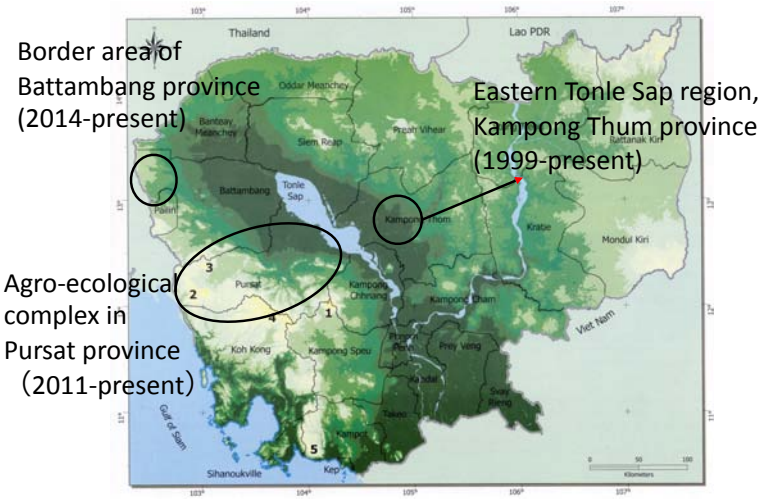
農業技術の変化に関する今後の調査に向けてのアドバイスがほしい。そこから生業と社会の別の側面が見えてくるはず

内容　＝＞　2つの地域、2つの時点（変化を考える）

復興期の状況：コンポントム州コンポンスヴァーイ郡サンコー区の調査（2000〜2001年）＝前回

2. 近年の状況：ポーサット州バカーン郡の調査（2013〜2016年）

最近の調査



前回の復習：2000〜01年の稲作

コンポントム州コンポンスヴァーイ郡サンコー区

牛・水牛の利用（牛蹄脱穀など）

伝統的品種に対して、近代品種が導入を始めていた（浮き稲は1980年代から政府品種）

「結」のような労働交換はなくなっていた。宗教儀礼もなくなっていた

しかし、農業技術そのものは、デルヴェールが報告する1950〜60年代のものと大差ない状態だった

前回の復習: 農業技術の近代化過程

カンボジアには、早くから国際的な技術協力が入っていたこと

1980年代には、化学肥料や新品種がもたらされた。しかし、定着しなかった

1990年代半ば以降、新しい技術や品種の情報が入ってきた。しかし、2000年前後の稲作は、ほぼ伝統的な形だった

本日の内容

- 問い：2000年代半ば以降、カンボジア農村社会と稲作はどのような変容を示しているのか？

問題の背景＝「2000年代以降に急変した国内状況」

社会体制の変化（「復興」から「開発」へ）

経済発展（GDP per capitaなど）

政治的安定（フン・センの権威主義体制）

- カンボジア政府の積極的な農業政策（稲作の増産）

四辺形戦略（初鹿野 2013）

1990年代、積極的な外資の受け入れによる経済成長　→　1990年代末には中国系縫製業の工場進出　→　2009年の欧米市場の冷え込みというブレーキ、しかし現在も国内経済の主力

2004年7月、経済開発戦略「四辺形戦略：カンボジアにおける成長、雇用、均衡、そして効率性」

それにもとづく具体的政策をまとめた「国家戦略的開発計画」（NSDP）

農業セクターの重視

国内経済全体をみれば、外資による縫製工場などの輸出産業が支える構造は変わらない

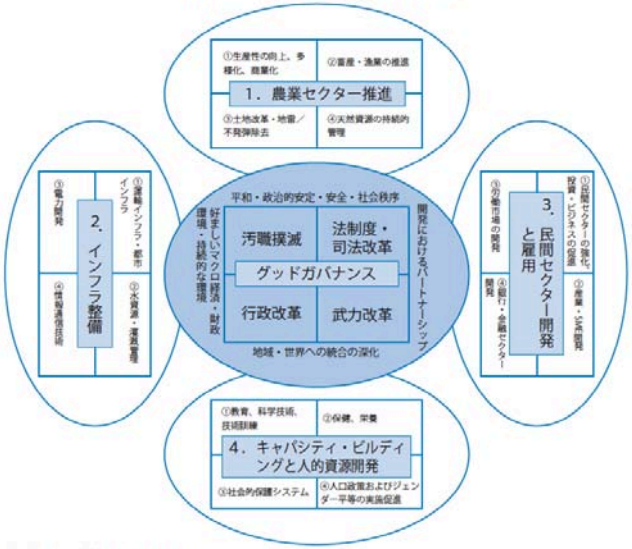
しかし政府は、第一次〜第三次の四辺形戦略およびNSDP（2006-2010/2009-2013/2014-2018）において、常に農業セクターの重視を打ち出してきた

なぜ？

人口の8割以上の農村居住者への対応（選挙対策）

本気で、農業による経済成長を考えている？？？

図１　第三次四辺形戦略見取り図



（出所）カンボジア政府資料より抜出。

Policy on the Promotion of Paddy Production and Rice Export (2010)

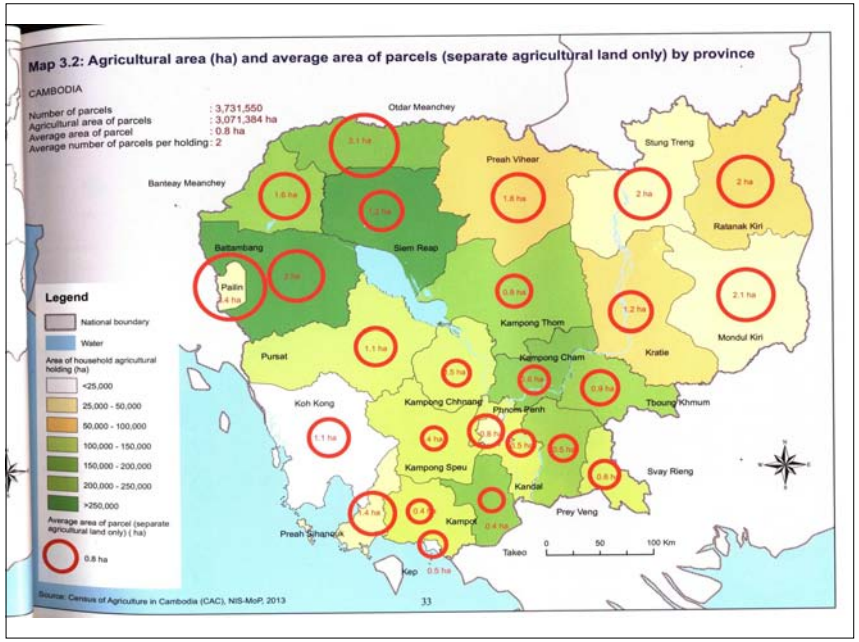
「カンボジアを世界のライスバスケットに！」（フン・セン首相の肝いり）

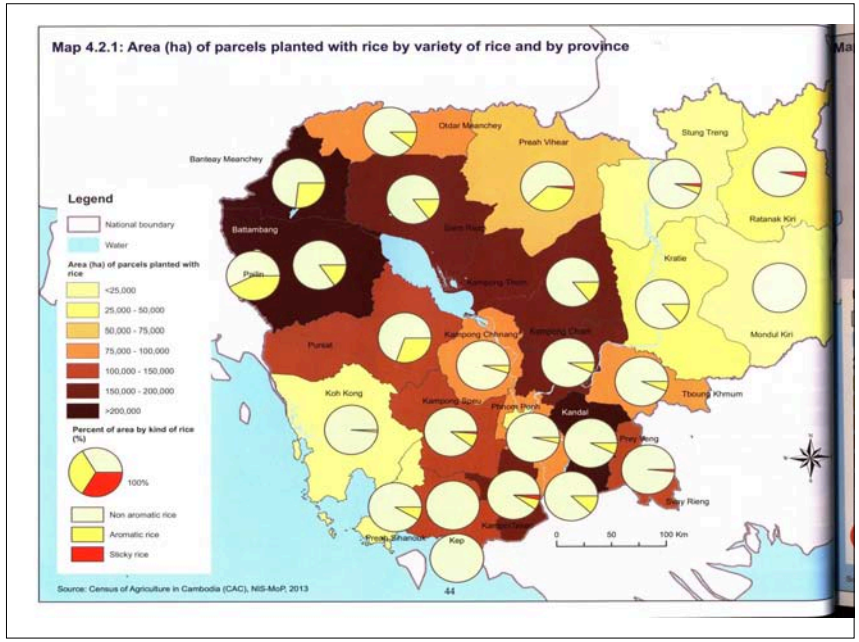
2015年までに余剰米を400万トン以上とし、うち少なくとも100万トンを精米して輸出する。そのために、米の（1）生産性の向上、（2）多様化、（3）商業化の促進

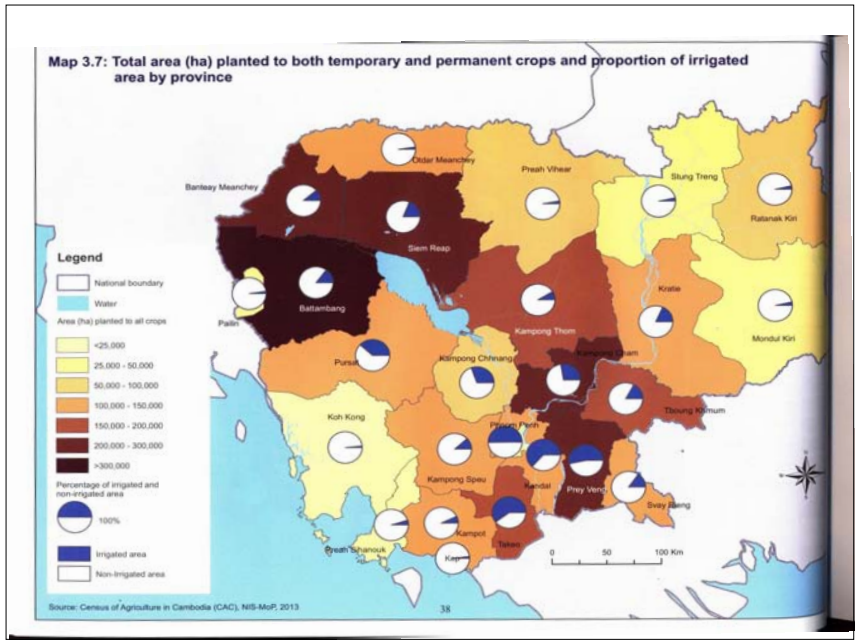
具体的政策としては、（1）灌漑・道路・市場基盤の整備、（2）農業技術の向上、（3）金融アクセスの改善、（4）農業関連投資の促進

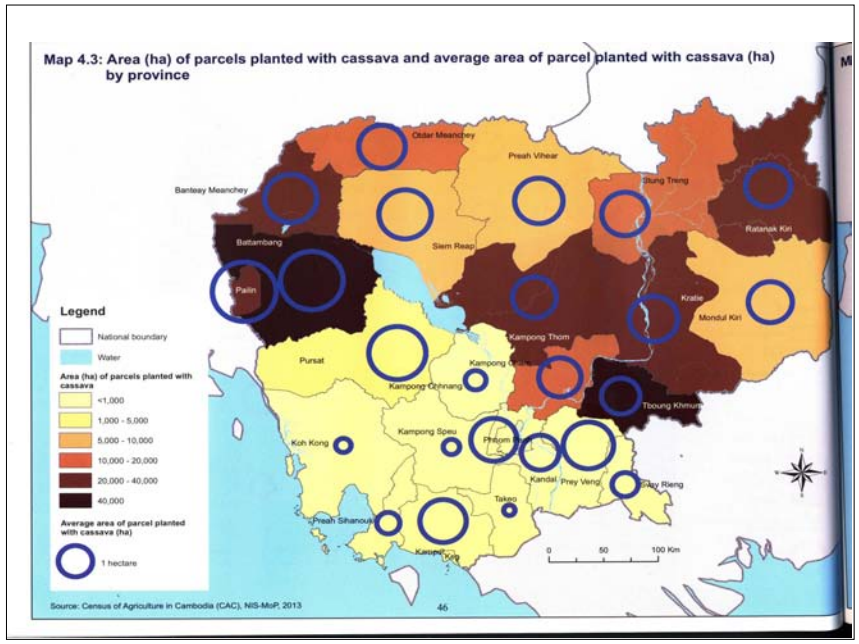
2013年には、余剰米400万トンの目標を達成。精米輸出は40万トン（2013年）に、54万トン（2015年）と目標を達成できず

輸送コストの問題、精米業者への金融支援の不足、農業従事者の所得向上に結びついているのか？


Map 3.2: Agricultural area (ha) and average area of parcels (separate agricultural land only) by province
CAMBODIA
Number of parcels : 3,731,550
Agricultural area of parcels : 3,071,384 ha
Average area of parcel : 0.8 ha
Average number of parcels per holding : 2
Legend
National boundary
Water
Area of household agricultural holding (ha)
<25,000
25,000 - 50,000
50,000 - 100,000
100,000 - 150,000
150,000 - 200,000
200,000 - 250,000
>250,000
Average area of parcel (separate agricultural land only) (ha)
0.8 ha
Otdar Meanchey
Banteay Meanchey
Preah Vihear
Stung Treng
Ratanak Kiri
Battambang
Siem Reap
Pailin
Kampong Thom
Mondul Kiri
Pursat
Kratie
Kampong Cham
Koh Kong
Kampong Chhnang
Phnom Penh
Tboung Khmum
Kampong Speu
Kandal
Svay Rieng
Prey Veng
Kampot
Preah Sihanouk
Takeo
Kep
0 50 100 Km
Source: Census of Agriculture in Cambodia (CAC), NIS-MoP, 2013
33

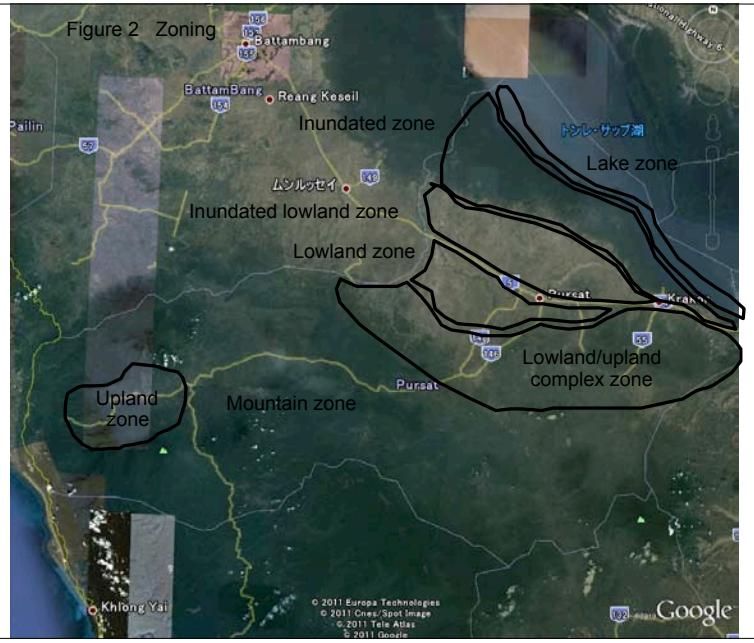

Map 4.2.1: Area (ha) of parcels planted with rice by variety of rice and by province
Legend
National boundary
Water
Area (ha) of parcels planted with rice
<25,000
25,000 - 50,000
50,000 - 75,000
75,000 - 100,000
100,000 - 150,000
150,000 - 200,000
>200,000
Percent of area by kind of rice (%)
100%
Non aromatic rice
Aromatic rice
Sticky rice
Otdar Meanchey
Banteay Meanchey
Preah Vihear
Stung Treng
Ratanak Kiri
Battambang
Siem Reap
Pailin
Kampong Thom
Kratie
Mondul Kiri
Pursat
Kampong Chhnang
Kampong Cham
Koh Kong
Kampong Speu
Phnom Penh
Kandal
Tboung Khmum
Prey Veng
Svay Rieng
Preah Sihanouk
Kep
0 50 100 Km
Source: Census of Agriculture in Cambodia (CAC), NIS-MoP, 2013
44


Map 3.7: Total area (ha) planted to both temporary and permanent crops and proportion of irrigated area by province
Legend
National boundary
Water
Area (ha) planted to all crops
<25,000
25,000 - 50,000
50,000 - 100,000
100,000 - 150,000
150,000 - 200,000
200,000 - 300,000
>300,000
Percentage of irrigated and non-irrigated area
100%
Irrigated area
Non-Irrigated area
Otdar Meanchey
Banteay Meanchey
Preah Vihear
Stung Treng
Ratanak Kiri
Siem Reap
Battambang
Pailin
Kratie
Mondul Kiri
Kampong Thom
Pursat
Kampong Chhnang
Koh Kong
Tboung Khmum
Kampong Speu
Kandal
Prey Veng
Svay Rieng
Kampot
Takeo
Preah Sihanouk
Kep
0 50 100 Km
Source: Census of Agriculture in Cambodia (CAC), NIS-MoP, 2013
38


Map 4.3: Area (ha) of parcels planted with cassava and average area of parcel planted with cassava (ha) by province
Legend
National boundary
Water
Area (ha) of parcels planted with cassava
<1,000
1,000 - 5,000
5,000 - 10,000
10,000 - 20,000
20,000 - 40,000
40,000
Average area of parcel planted with cassava (ha)
1 hectare
Otdar Meanchey
Banteay Meanchey
Preah Vihear
Stung Treng
Ratanak Kiri
Battambang
Siem Reap
Pailin
Kratie
Mondul Kiri
Kampong Thom
Pursat
Kampong Chhnang
Tboung Khmum
Koh Kong
Kampong Speu
Kandal
Prey Veng
Svay Rieng
Takeo
Preah Sihanouk
Kampot
0 50 100 Km
Source: Census of Agriculture in Cambodia (CAC), NIS-MoP, 2013
46

ポーサット州バカーン郡での調査から

Pursat province:
A miniature of agro-ecological diversity



「持続的生業研究に関するフィールドワークショップ」

王立農業大学、王立プノンペン大学の学部・修士コースの学生および若手教員との共同研究。2011年に始め、今年で第五回目の予定

ポーサット州の地域情報の収集

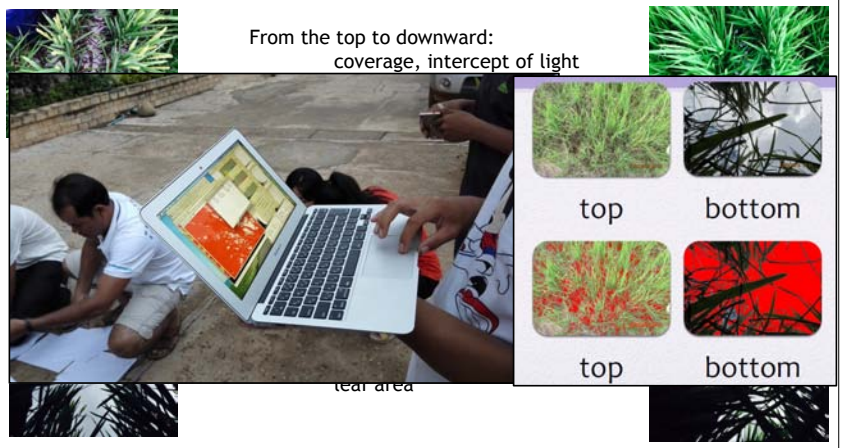
調査方法の教育

- 1日に1トピックの調査とデータ処理、夜にはプレゼン
- 課題の多様性
- 簡便な手法による客観的データの収集と分析

Example: Analysis of rice-growth

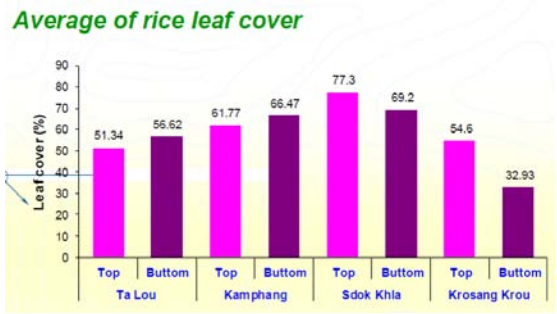
Evaluation of leaf (canopy)

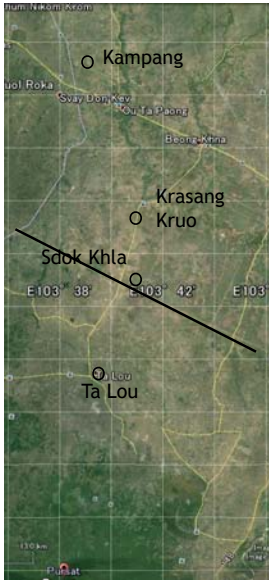
From the top to downward:
coverage, intercept of light



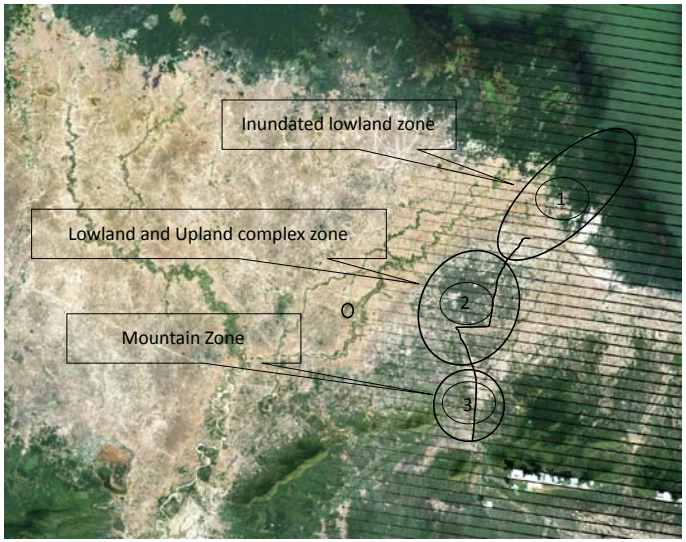
leaf area

Student's Presentation!

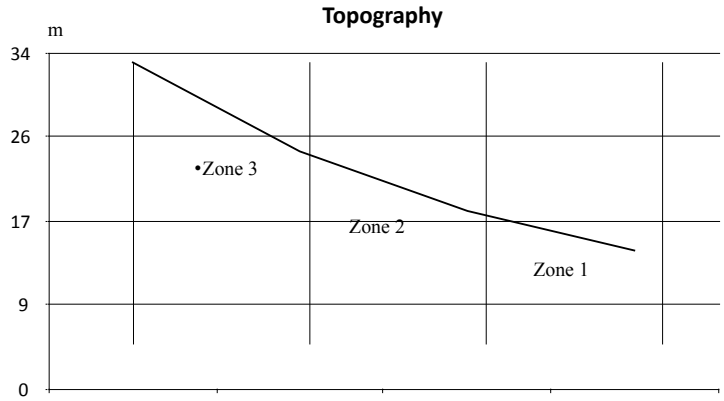




Three Zones Classification (RUA student report, Feb 2013)



Observed Area Topography
(RUA student report, Feb 2013)



Some indicators of classification in Zone 1: Inundated Lowland (RUA student report, Feb 2013)

Paddy field

Palm tree in the Paddy field

Flooded Forest

No Termite nest in the paddy field

Some indicators of classification in Zone 2: Lowland and Upland Complex (RUA student report, Feb 2013)

Paddy field with forest tree species

Termite nest in the paddy field

Soil texture

Forest still around the paddy field

Some indicators of classification in Zone 3: Mountain Zone (RUA student report, Feb 2013)

Forest tree species

Mountain and tree species

Rich of hardwood use

Up land farm

農村生活の近年の変化

新しいチャンス・機会の拡大

- インフラの発展
  道路、灌漑水路、電気
- 近代技術の浸透
  農業機械、高収量品種、化学肥料、商品作物、養殖、・・・携帯電話
- ポスト・ハーベスト処理の工場、流通網の拡大
  特にコメとキャッサバ
- 農外就労の機会の拡大
  縫製工場、海外への出稼ぎ

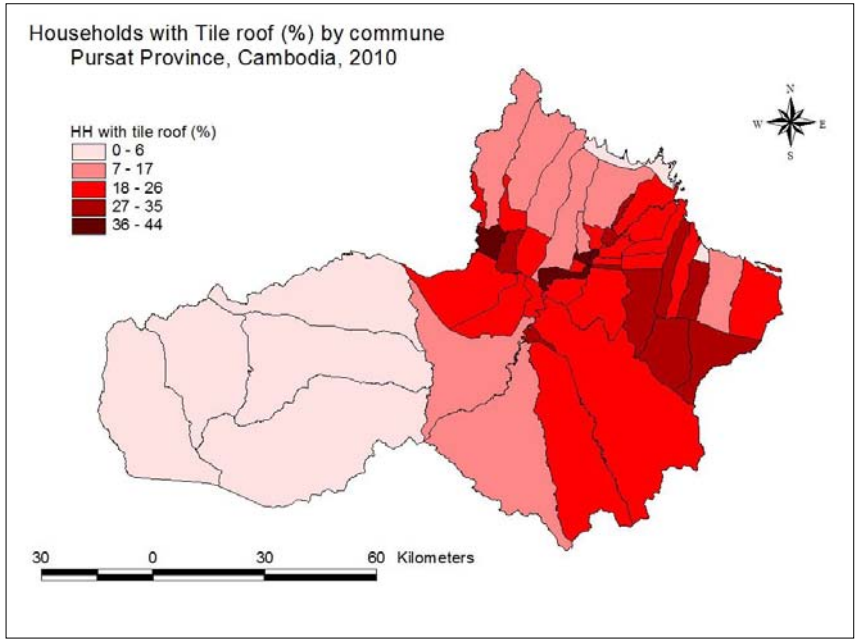
新しいリスク

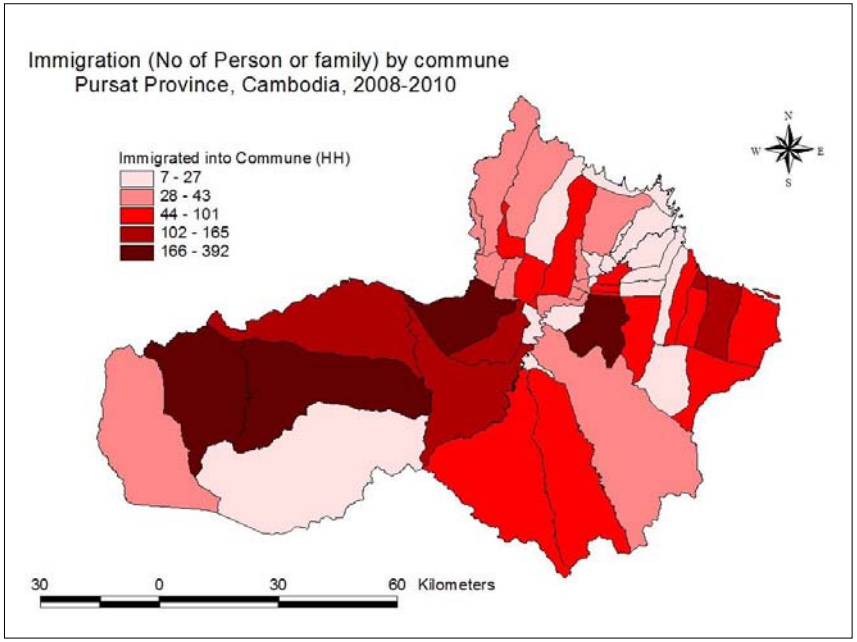
- 資源の劣化・枯渇
- フードセキュリティの低下
- 生産志向の政策によってもたらされる脆弱性

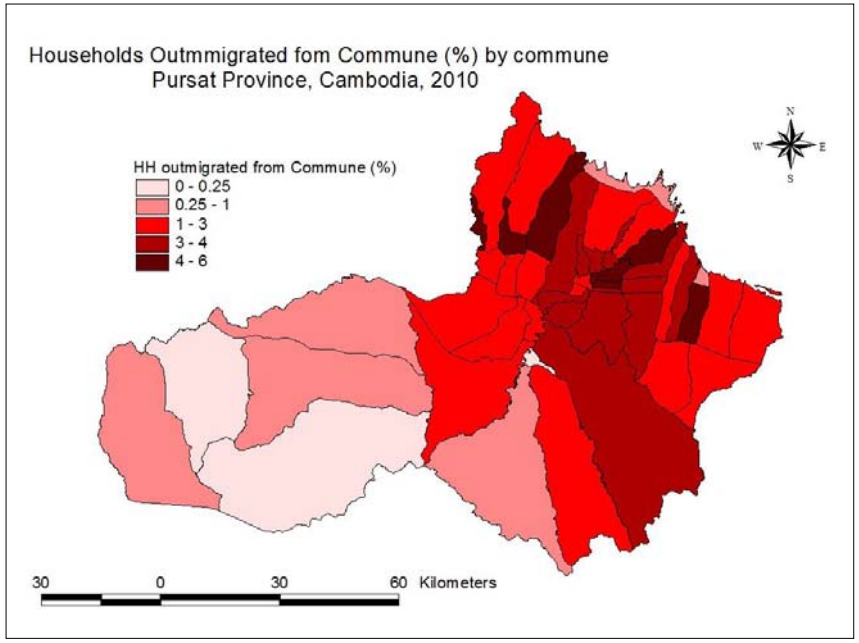
生業変容の駆動力

- 浸水低地／低地ゾーン
  - 市場向け稲作/労働移動（出稼ぎ）/マイクロファイナンス
- 低地山地複合ゾーン
  - 市場向け商品作物の畑作/マイクロファイナンス
- 山地／高地ゾーン
  - 低地からの移住者およびアグリビジネス会社による開墾

バカーン郡の調査







スライドショー

2014. 08　第2回ワークショップ（雨期）

2015. 09　第三回ワークショップ（雨期）

2016. 02　3か村90世帯の質問票調査（乾期）

Activities of the 2nd workshop in 2014

1. *“Rice Growing landscape according to Agro-ecological Zones”*
2. *“Rice growth and cultivation practice in lowland paddies”*
3. *“Value chains of local fishes”*

Activities of the 3rd workshop in 2015

1. *“Value chains of local fishes”*
2. *“Land use system in Pursat river basin area”*
3. *“Village history and elderly people”*
4. *“Rice growth and cultivation practice in lowland paddies”*

バカーン郡の3か村90世帯の質問票調査（2016年2月）

近年の稲作の変容

バカーン郡の質問票調査から分かること

伝統的な生業のかたち、環境は、コンポントム州の調査地とほぼ同じと考えられる

「灌漑水路」へのアクセス

2000年代の市場向け稲作の登場（品種、化学肥料）、収量の上昇

出稼ぎ、機械化、小規模金融の浸透

想定される変化

品種の問題（モノカルチャー？）

作業の問題（機械化、農法の変化）

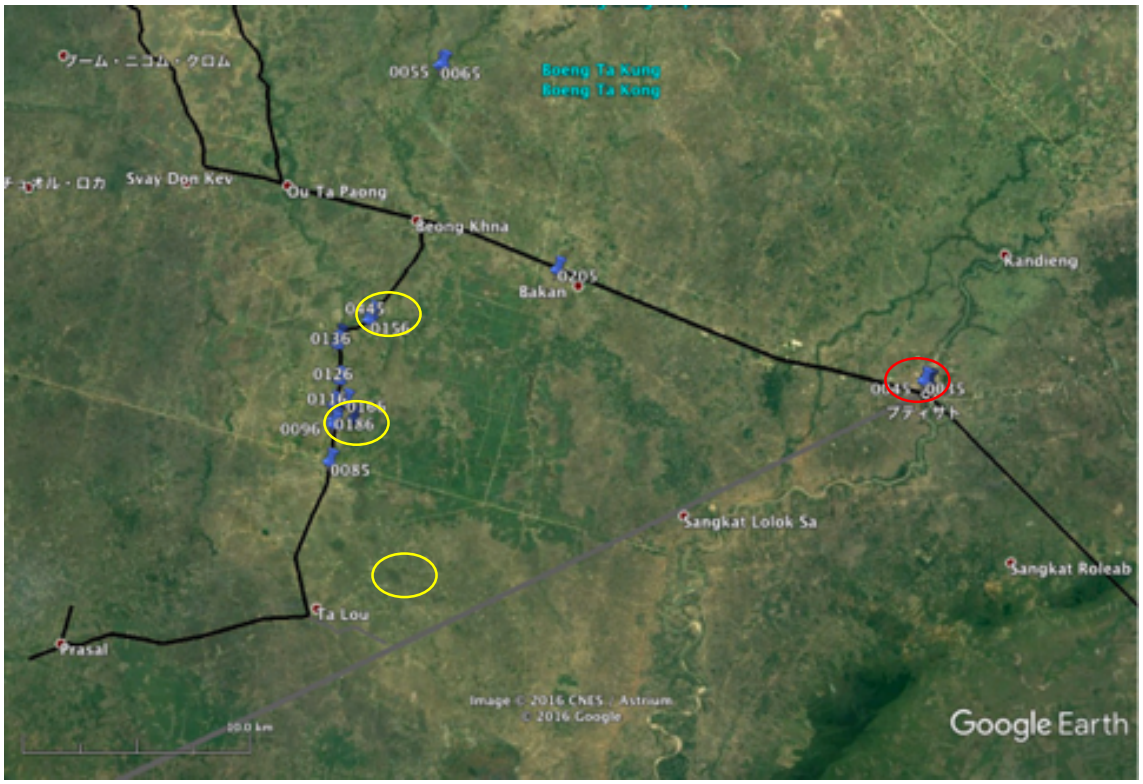
「文化」としての稲作の継続？

有機栽培などの普及？

ポーサット州バカーン郡3か村90世帯の質問票調査（2016年2月）

小林　知

1．立地



2．基礎情報

表1　調査村の概況

村名	PL	SK	PR
開祖／開村の時期	カンプチアクラオム／20世紀前半	タケオ州・コンポート州からの移民／20世紀前半	タケオ州・コンポート州からの移民／20世紀前半
家族数	121	172	約300
平均的な所有農地面積（ha）	2.5	3	2
土地なし家族の数	7	4	約12

出所）筆者による各村の村長への聞き取り．

表2　世帯の構成の類型

タイプ	該当件数	平均構成員数
単身型	1	1
夫婦型	5	2
欠損型	5	2.2
核家族型	56	4.2
拡大家族型	23	5.5
計	90	−

出所）筆者調査

表3　家族の構成の類型

タイプ	該当件数	平均構成員数
単身型	1	1
夫婦型	3	2
欠損型	3	4
核家族型	61	4.6
拡大家族型	22	6.5
計	90	−

出所）筆者調査

表4　生計の手段

活動	回答件数
水田耕作	84
畑作	30
出稼ぎ	14
農業労働	11
雑貨販売	10
大工/建設労働	9
家禽の飼育	7
野菜栽培	6
養豚	5
食物の行商（野菜、魚	5
トラクターの運転	5
漁労	3
食堂	2
行政職	2
研ぎ師	2
酒造	2
籾稲仲買	2
トラクターの自営	2
運搬業	1
自家製菓子販売	1
コオロギ売り	1
自動車整備	1
牛の飼育	1
看護婦	1
資源ゴミ収集	1
医者	1
DVD貸し出し	1
ミシン縫製	1
精米	1
結婚式の料理人	1
結婚式の写真撮影	1

表5　最も重要な生計手段（複数回答なし）

活動	回答件数
水田耕作	67
雑貨販売	4
農業労働	3
大工/建設労働	3
魚の行商	3
畑作	2
家禽の飼育	2
送金	1
運搬業	1
菓子製造販売	1
トラクター経営	1
看護婦	1
養豚	1
計	90

表6　最も収入の多い生計手段（複数回答なし）

活動	回答件数
水田耕作	60
送金（出稼ぎ）	7
大工	4
農業労働	3
雑貨販売・商売	3
魚の行商	3
家禽の飼育	2
畑作	1
トラックの運搬業	1
トラクター経営	1
コオロギ売り	1
看護婦	1
トラクターの雇われ運転	1
医者	1
木工	1
計	90

表7　出稼ぎ者の就労先（90世帯中29世帯から回答）

就労先	人数
タイ	17
韓国	17
プノンペン	10
国内の他地域	6
計	50

表8　世帯別の所有財産		
項目	所有世帯数	所有数（実数）
車	3	3
トラック	1	1
ハンドトラクター	42	43
トラクター	5	5
脱穀機	1	1
収穫機	0	0
ポンプ	17	18
バイク	71	89
カラーテレビ	76	80
ラジオ	18	18
携帯電話	80	156
発電機	0	0
ソーラーパネル	17	18
牛	25	68

３．村長とのインタビュー・メモ（抜粋）

ポーサット州は、首都プノンペンから西に約190キロメートルの距離にある。州の北部は、トンレサープ湖からカルダモン山脈に連なる山稜のあいだに拡がる水田地帯が占める。バカーン郡は、その水田地帯の西部に位置する。郡の地理的範囲の北部には、タイ国境から首都プノンペンを結ぶカンボジア国内の東西物流の主要幹線道路である国道5号線が走っている。そして、国道の南約10キロメートルには、同州の山稜から流れて出てトンレサープ湖に注ぐポーサット川から取水した農業灌漑水路（「ドムナック・オンペル水路」）が国道と平行して東西に伸び、地元住民の一部が稲作に利用している[1]。幹線道路に接し、近代的な農業技術の普及もみられる点で、急速な社会変化の渦中にある現代カンボジア農村の状況をよく代表する地域であるといえる。

ポーサット州では、多くの村で、タケオ州やコンポート州からの移住者の存在を耳にする。歴史をさかのぼると、この地域一帯は、1960年代までメコンデルタ地域出身の移住者を多く受け入れていた[2]。同州は、ポル・ポト時代には、その過酷な支配が最も徹底して敷かれた地域として知られ、多く死者をだした。同州の低地部は、国連が準備した選挙が行われた1993年前後に治安が回復してい

[1] この大型水路は、もともとポル・ポト時代につくられた。その後放置されてきたが、2010年頃に政府が修繕し、再び使われるようになった。

[2] この特徴は、トンレサープ湖の周りを取り囲むその他の州でも同様である。その多くは、人口が稠密であったメコンデルタ地域から、未開地が多いトンレサープ湖周辺地域に向かう、土地を求めての自発的な移住であった。

たが、南部のカルダモン山脈は 1998 年前後までクメール・ルージュの活動域だった。

バカーン郡における調査は、国道沿いのマーケットタウンのひとつから南に延びた幹線道路沿いの 3 つの村を選び、行った[3]。すなわち、国道にもっとも近いロムレッチ区プロラーイロムデーン村、農業灌漑水路の近くに位置するロムレッチ区スドッククラー村、そして山稜に近いタロー区プレイルーン村である（地図 1）。2 つの行政区に跨がる 3 つの村では、まず、それぞれ 30 世帯をランダムサンプリングし、質問票を用いた生活状況の聞き取りを行った[4]。また、各村の村長や古老を訪ね、村とそれをとりまく環境の変化や、宗教儀礼の実施について集中的な聞き取りを行った。さらに、各村の住民が主に訪問する仏教寺院を訪問し、住職その他にも聞き取りをした。

○PL 村

最初の村は、プロラーイロムデーン村である。村長によると、2016 年 2 月にいた 121 家族のうち、9 割以上は稲作をおこなっているという。その大多数は、2.5 ヘクタールほどの水田を所有する[5]。土地なしは 7 世帯しかいない。「ドムナック・オンペル水路」までは南へ 6 キロメートルほど離れているが、2010 年頃から灌漑水の一部があいだの村々の水田を越して届くようになった。それ以降、村では、換金目的の品種を選び、売るための稲作を行う世帯がほとんどになった[6]。

プロラーイロムデーン村の歴史は長いと村人はいうが、詳細は明らかでない。確実なのは、20 世紀初頭にはカンプチアクラオム（ベトナム領メコンデルタ出身のカンボジア人）の人々が開拓者として多く住み、生活していたことである。彼らは、開墾して水田耕作をおこなうと共に、森を伐採して得た木材を売却し、牛を育てた。ポル・ポト時代に、カンプチアクラオムの人々は、ベトナム出身であることを理由に迫害された。ポル・ポト時代の後は、帰還したもともとの村人と、ポル・ポト政権下で強制移住を命じられて村周辺に来ていた人々の一部が残り、生活を再開した[7]。1979 年に 86 だった家屋の数は、1996 年には 100 近くに増えた。村の周辺は 1980 年代末には土地権が確立しており、1990 年代初頭に

---

[3] 幹線道路は、2015 年に舗装化されたばかりであった。

[4] サンプリングは、村長が保管していた村内家族のリストから、30 個の乱数に当てはまる番号の家族を選ぶ方法で行った。

[5] 調査を行った 3 つの村ではポル・ポト時代以後、カンボジアの他の農村と同じく、居住する全世帯に土地が配分された。その後、プロラーイロムデーン村とスドッククラー村では、1980 年代末には無主地がなくなり、新規の農地の取得は購入に頼るしかなくなった。プレイローン村は、山稜に近く、1990 年代まで農地を無償取得する機会が残っていた。

[6] 村にはまた、村のちょうど中心にある自然池の水を利用して、野菜栽培をおこなう世帯も多い。野菜栽培は、稲作とともに、2004 年からアメリカの NGO の技術指導が入ってから盛んになった。

[7] 後者には、なかでもコンポート州出身の人々が多いという。

は新規の移住者を受け入れる余地がなくなった。近年の家族数の増加は、村人の子供たちが結婚して独立したものである。

国道に近いプロラーイロムデーン村は、今日のカンボジア農村の変化の潮流をいち早く受けている。政府が敷いた電線は 2013 年に村に届き、2015 年には利用者が拡がった。マイクロクレジット組織による融資の浸透も早く、村落世帯の 70 パーセントは、ハンドトラクターを買ったり、土地を買ったりすることを主な目的として、土地などを抵当にお金を借りている。さらに、2000 年代初頭から出稼ぎが増加した。村長によると、現在村の 20 家族以上が、成員を首都プノンペンやタイへの出稼ぎに送っている。2000 年代半ばにはマレーシアへの出稼ぎが増えたが、その後減少し、代わって韓国への渡航が人気を集めている[8]。

〇SK 村

2 つ目のスドッククラー村は、プロラーイロムデーン村から幹線道路を 4 キロメートルほど南下した場所にある。この村は、20 世紀半ば以前にタケオ州やコンポート州からの開拓移住者によって形成された。ポル・ポト時代以降は、特にコンポート州の出身者が、内戦以前から同村に住む同郷の人々との関係を頼りにして移住し、屋敷地と農地を購入して定住した。ただし、逆に、村の土地を売って、さらに南のカルダモン山脈に連なる山稜地帯へ移出する村人もいる。

同村の家族数は 172 であり、村人の主な生業は稲作である。半ば以上の家族が 3 ヘクタールを超える規模の水田を経営している。土地なしは 4 家族だけである。現在土地なしの世帯は、病気治療のために農地を売ってしまったケースである。現在、村の 60 パーセントの世帯は、雨期稲だけでなく、乾期稲も栽培する。これは、2 キロメートルほど離れたドムナック・オンペル水路の水が利用できるようになってからはじまった[9]。この村で乾期稲作を始めた世帯は、雨期には販売用の「香り米」を栽培し、乾期は 2 ヶ月半から 3 ヶ月で成熟する高収量の近代品種をつくる。前者は種籾を残してすべて販売し、後者を自家消費用にまわしている。

この村にも、マイクロクレジットの利用やタイや韓国への出稼ぎが近年浸透している。マイクロクレジット組織による貸し付けは 2000 年には存在したが、2005 年ころから村人の関心が高くなった。トラクターを買うため、出稼ぎの資金を確保するためといった目的で土地を担保に入れて借金をする[10]。韓国への出

---

[8] 韓国への出稼ぎは、韓国語の試験に合格しなければならないため、高校を卒業した教育レベルの高い若者が中心である。2013 年ころからは、韓国に子供が出稼ぎにでた家が、幹線道路沿いに土地を買って家を建てるようになった。

[9] ポーサット州政府は水路の管理のために官制の利用者団体をつくったが、同村は受益者の末端にあるため、組織化が及んでいない。つまり、ポンプによる水のくみ上げの回数やタイミングは、村人の個人の裁量に任され、放任されている。そのためもあり、利用できる灌漑水の量は安定していない。

[10] 村長が理解するところでは、調査時点ではいずれの村でもまだ、マイクロクレジット組織への返済が滞り、担保が強制的に回収されたケースはないという。

稼ぎは、先のプロラーイロムデーン村よりも遅く、2012 年からはじまったという。

○PR 村

第三の調査村であるプレイルーン村は、スドッククラー村からさらに 6 キロメートルほど南へ進んだ位置にある。村の周囲は水田であるが、4 キロメートルほど南には山裾に開かれた畑地がある。村長によると、今日の村には約 300 の家族が住む。住民の生業は稲作と畑作である。農地所有は、世帯あたり 2 ヘクタール程度が平均であり、土地なしも 4 パーセントほどいる[11]。灌漑設備がなく、雨期しか耕作できない。雨期の稲作は、田植えが減り、直播きが中心となっている。村内の 10 パーセントほどの世帯は、畑地も所有する。最近 2 年ほどは、キャッサバの栽培が人気を得ている。日雇いの農業労働者として畑作に関わる世帯も多い。稲作と畑作に次ぐ生業は出稼ぎである。出稼ぎは、韓国へ出た者が最も成功している[12]。

プレイルーン村は、20 世紀半ばころから存在する。開祖は、タケオ州とコンポート州から来ていたという。これらの開拓者は、現在の村人の祖父母の世代にあたる。一方、村が位置する一帯は森に近く、1990 年代初めまで政府軍とクメール・ルージュの攻防の前線であった。治安が安定した 2000 年代以降は、タケオ州などから一部新たな移住者を迎えてきた[13]。

○生業活動の変容

以上に述べた村ごとの概況の説明から既に明らかなように、住民の生業活動は、現在も稲作が中心である。村落間や世帯間で、所有する農地の条件、特に灌漑水路へのアクセスや土壌の質における違いはあるものの、90 のサンプル事例のうち 86 は農地を所有し、うち 84 からは実際に稲作を行っていると回答した。世帯あたりの所有農地面積の平均は 2.7 ヘクタールであった。

地域の住民は、稲作を中心としつつ、様々な生計の手段を複合的に組み合わせて生業活動を行っている。質問票調査で、自身の家族が従事する生計手段を列挙してもらったところ、稲作に次いで多かったのは畑作（30 件）であった。その他は、出稼ぎ（14 件）、農業労働（11 件）、雑貨販売（10 件）、大工・建設労働（9 件）、家禽の飼育（7 件）、野菜栽培（6 件）、養豚（5 件）、野菜・魚・菓子の

---

[11] 土地なしになった理由は、病気治療のほか、農地を売って得た金を移住資金にして村の南に拡がる森林地域に移住し、新たに土地を買って生活を切り開く計画を立て、実行に移したものの、最終的に失敗して土地なしになったケースもある。

[12] ここでも、他村と同様、マレーシアへの出稼ぎは近年減少したという。人数でみたときの最大のグループは、数十世帯が関わるタイへの出稼ぎである。

[13] その多くは、先に移住してきた親類を頼ってきた人々であった。しかし、そのうち数世帯は、村の稲作の条件が良くないため、一定期間の後に再びタケオ州に戻っていったという。

村内での行商（5 件)、トラクターの運転（5 件）といった生計手段が続いた[14]。地方の役人・医者などの職に就き、月給を得ていたのは 4 世帯だけだった。

地域の稲作と畑作は、伝統的な生業であるが、それも変化の渦中にある。例えば稲作は、栽培品種と耕作の仕方が、時代に合わせて変化している[15]。水田や畑地の耕起は、もともと牛や水牛を用いており、かつてはほぼすべての農家が役畜を所有していたと考えられる。しかし今回の調査で、牛と水牛を所有していたのは 25 件と 19 件だけだった。その一方、42 件はハンドトラクターを所有し、農地の耕起や、荷の運搬などに使っていた。

出稼ぎの重要度は、質問票調査からも明らかである。サンプルのうち 29 件の家族は、調査時に、家族のメンバーのいずれが就労を目的として村外に住むと答えていた。そのうち、就労先が確認できる 50 名についてみると、タイと韓国が 17 名ずつ、プノンペンが 10 名、カンボジア国内の他州が 6 名であった。タイへの出稼ぎについては、友人や知人の紹介にもとづく渡航が中心であり、配偶者や子供をともなって移動することも多い。ただし、村に残る家族へ定期的な送金を行う事例は少数だった。一方で、韓国への出稼ぎは、韓国語の試験に合格した後に斡旋業者の仲介を受けて渡航するもので、ひと月あたり 600～1000 ドルの送金を得ていた。

---

[14] カンボジアの農村の人々の貴重なタンパク源の取得手段として、農村の伝統的生業を考える際に欠かすことができない漁労は、3 件と少なかった。

[15] 例えば、インタビューの中では、以前は苗床を準備してから田植えをしていたが、いまはより手間がかからない直播きに転換したという話を多く聞いた。栽培品種も、市場で高い値がつくものを選ぶようになった。